Aug. MILK HALL Times 1989

CICADA

ミィ〜ン　ミィ〜ン　ミィ〜ン

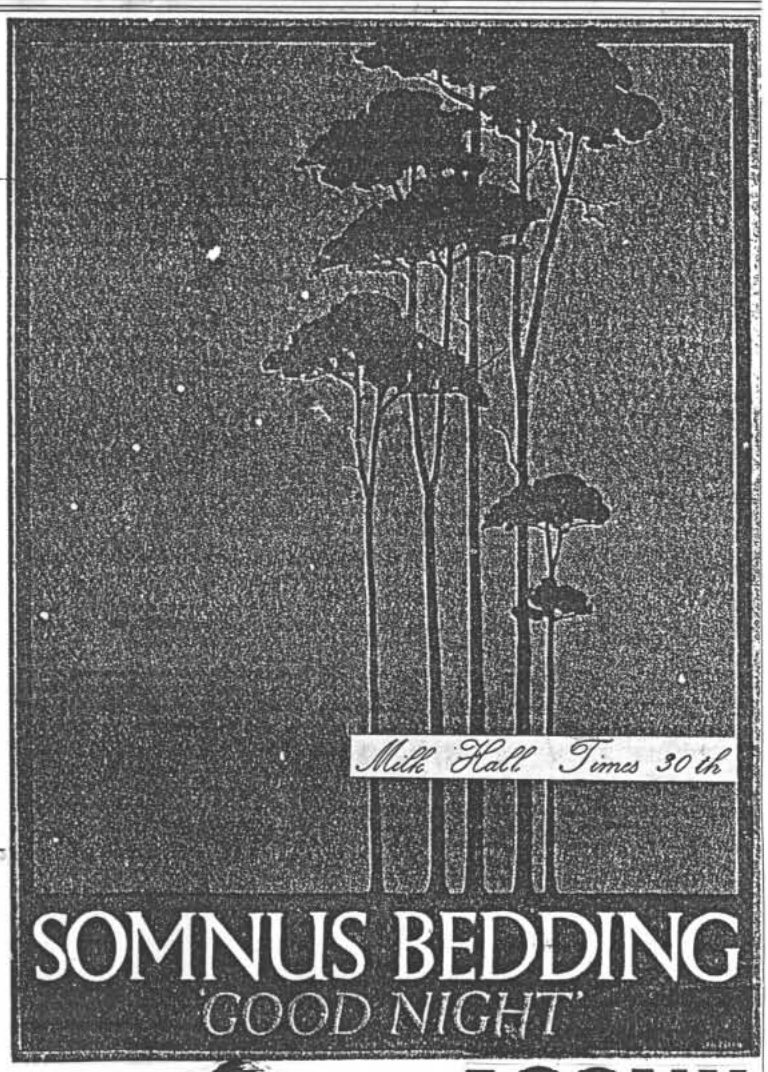
最後の最後の力を振り絞るように、アブラゼミが鳴いている。
アブラゼミ達の合唱は、夏の終わりには真夜中まで激しく続けられる。
７年間と７日間の生命の最後の証をこの世に残そうとするのか、最後の一瞬まで夏の日の王者であろうというのか。つくつく法師にその座をとってかわられまいとするのか。

その名の通り油ぎった必死の大合唱が絶頂に達する頃、
日本中は甲子園の汗と涙の大舞台となる。日を増すごとに激しく打ち鳴らされる太鼓の音、張り裂けんばかりの応援と連呼。一試合終ると同時に鳴り響く無情なサイレンの音。種々様々な音のなかで繰り返し繰り返し繰り広げられる甲子園。

甲子園に最後のサイレンが響きわたると、力つきたアブラゼミがバラバラと空から降ってくる。地面という地面に、路上や庭園、部屋の中までにも最後の自由な飛行を終えて横たわる。

彼らは、７日間という日々を、死を前にしたこの世で最も勇敢な小動物として激しく生きる。彼らの道は、死と生殖の道。足元に横たわるのは、夏の勇者の亡骸である。

音の残像を残して夏の夜には静寂が戻り、
つくつく法師が鳴き始めた。



AIR MAIL

サンフランシスコからの手紙

NO，1

昔、この店にいつもコーヒーを飲みにくる老人がいたのを覚えている。
その老人はきまって毎週火曜日の夕方店にやって来た。その人の服はいつもヨレヨレの濃い灰色の背広で、それ以外の服を着ているのを僕は見たことがない。老人はその灰色のズボンに片方の手を突っ込んで、店のなかを少し眺めた後自分の席に腰掛ける。ウェイターが来るとその人は特有の鋭い目で若いウェイターに目を遣り、コーヒーを註文する。
コーヒーが来るまでの間、老人はいかにも美味しそうに煙草をくゆらせる。
コーヒーが運ばれると、老人はもう一度あの特有の目つきで若いウェイターに礼を言って、煙草を消し、ゆっくりと砂糖を入れる。黒砂糖と白砂糖を一杯づつ、よく定まらない手で２回程かき回す。ミルクは、入れない。
一口一口確かめるようにコーヒーを飲み干すと、テーブルの上にお金を置いてサッサと帰ってしまう。若いウェイターはほとんどその帰る姿を見とめることが出来なかった。

いつの頃からか、その人はもうあらわれる事が無くなったが、今も時々、その人が大事そうにコーヒーを飲む時の幸せそうな顔を思い出す。

ミルクホールの皆さんお元気ですか？
上記の文をミルクホールタイムスに、ぜひ載せて下さいね。
今年は黒鯛が釣れていないそうで僕は安心しています。今年も皆は釣り旅行へ出掛けるのですか？沢山釣れるといいですね。・・では、また

NO，2

ミルクホールへ
暑中お見舞い申し上げます。暑中とは言うもののサンフランシスコの夏は寒く、僕は風邪をひいてしまった次第です。特に夜は冷え込んで、ジャンバーに両手を突っ込んで街を歩いています。ほんの少し日本の暑い夏が恋しいですが、来年はいやでもその暑い夏を過ごすので、今年はこの涼しい夏を楽しもうと思います。
ミルクホールの皆は、今年も恒例の釣り旅行大会に出掛けるのですね。今年は雨が降らないといいですね。砂浜でお月見をしたのは一昨年の旅行だったと思いますが、今年はまたお月見が出来るといいですね。僕はこちらで一人で部屋から月を見ながら、来年の釣りの作戦でも考える事にします。僕の第六感によると、今年はソネ君が黒鯛を釣ってしまうような気がしてなりません。ぜひ今年の釣り戦線の結果を知らせて下さい。
僕の夏休みは後２週間余りで、特に予定もなくのんびりと絵を描いています。
先々週初めての油絵を描きました。このまま描き続ければ老人になる頃には人を感動させるような絵が描けるのではないかと多少の自信はあります。せいぜい頑張ります。
先日の夜、暇にまかせて友達とドライブに出掛けました。彼に全てをまかせてあっちこっちと走りまわっている途中、道に迷って見るからに物騒な街に入り込んでしまいました。見ている分には随分カッコイイ街なのですが、そのなかに今自分が居るかと思うとやはり恐ろしいものでした。その後３０分余り堂々巡りをして最終的には無事家に辿り着きました。・・・それでは皆さん楽しい釣り旅行と良い休暇をお過ごし下さい。

寒いサンフランシスコより

AGONY

或る日、不意に画面一杯に大写しになって現われた。
ついにあの幼女連続誘拐殺人の犯人が捕まったのだ。
テレビも、新聞も、世間はハチの巣を突いたような大騒ぎをしている。
マスコミはあたかも自分達が、神の代弁者だと言わんばかりに自分のエゴを丸出しにして「殺人鬼」「狂人」「現代の悪魔」等と彼を攻撃しまくっている。
くそっ！マスコミってのはまるで死んだ獲物に群がるハイエナだ。人を傷付けて平気でいる。
俺は、犯罪記事を見る度に思う。彼らも同じ人間じゃないか。彼らだって昔はちゃんとした道徳観も持っていただろうし、俺たちと同じ様に普通の女を好きになったのだろう、きっと。それがこんなマスコミや俺たちのいる世の中で生きて行くうちにだんだんと考え方や興味の対象が変化してしまったのだろう。ただ彼らは、その変化した対象や考え方にあまりに忠実過ぎてしまったのだ。
彼らだって好きで犯罪者になったわけでは無い。ただ本当にやりたい事をこんな世の中で生きて行くうちに取り違えてしまったのだ。そんな彼らに俺は、意思が弱いんだなんて言えない。その取り違えを生みだした根本の責任は俺たちに在るのだろう、きっと。
そして社会によって創りだされた犯罪は、社会によって処分される。
ただその責任を取るのは、犯罪者と、その家族だけだ。
俺は決して殺人が許されるなんて思わない。殺された人の遺族の気持が分かるなんて言えないが、その人達の気持を推測するのもおこがましい程の、本当に悲しい物なのだろう。
多くの犯罪の裏には、社会で生きて行く事がいかに難しい事なのかを語っている。
どうしてこんな事になってしまっただろう・・・・
一度この世界に生まれてしまったからには、しっかりと、目を見開いて生きて行くしかない。・・・最後まで読んでくれた方、有り難うございました。

M. SONE

★編集部より

随分長々とサンフランシスコからのエア・メールを紹介させて頂きましたが、トール君が手紙の中で何度も書いているようにミルクホールでは毎年９月の始めに全員で夏休みをとって釣り旅行に出掛けているのです。そんな訳で９月４日から６日までは誠に勝手ながらお店を閉めさせて頂きます。７日より平常通り営業を再開致しますのでどうぞ宜しくお願い申し上げます。サンフランシスコのトール君は来年帰国しミルクホールに復帰するそうです。本人が『僕は少しだけ、成長致しました。』と遠慮ぎみに語っておりますので、皆で彼の成長ぶりを楽しみに待つ事にしています。
・・・・・・・大釣り旅行大会を目前にして、ワクワクしているミルクホール一同

Milk Hall Times 30th 1989 8.27 printed by Gurnny's Collection phone 0467(22)1179